ウイスキー　物語 II.　無神妄論

人間はとりわけ面白い生き物である。
もし、食霊それ自身が夢想の力であるなら、人間はまさしく純粋な欲望の集合体であり、純粋に自分以外は、飲み込みたいと思ってさえいる存在である。

彼らの信頼を得た後は、それ以前は偽善的だった男の、私に対する様子が急速に変化した。
私が準備時間を提示した後、善良な国王は私の要望を快諾してくれた。
それと同時に、あの男は国王から主導権を握り、私を招待している間は担当することになった。
その時知ったのだが、彼は国王の弟――カール（卡尔）親王であった。

「ウェッテ先生は商人なのに、医学も分かるとは思いませんでしたよ。」
「ほんの少し知っているだけです。」
「以前に、どこでこのような仕事をしたことがあるのですか？」
「医学といい錬金術といい、全て、自分がより多く取引する手段として用いることができます。」
「取引？」
「おや、貴殿は忘れましたか？私は商人ですからね～それでは、人々と取引するのに元も価値のあるものは何でしょうか？」

私は頭の横をそっと指で叩いて、彼のその腐敗した頭で少しだけ考えさせたいと思った。

「お金？宝物？それとも権力？」
「ふふふ……命です。人は死から逃れられない、そうでしょう？」
私は、その目の中に欲望がにじみ出ている人間を見て、かすかに私の声を低くした。
思った通り、こうすれば彼から重視され、彼の表情が一瞬で固まった。それから、私は全く気にしない様子でまた顔を向けた。
「しかし、それでも、命の価値も人によって違うのです。」

「それは当然のことです、人にはもともと貴賤の区別があるものなのです。これは、なぜ私がここに存在できるのかということの原因であり、また同様に、今後私が王になることができる証明でもあります。」
「貴殿の言う通りです、すべてが、運命に翻弄されているせいです……」

明らかに彼は、私が彼の望み通りの回答をしたことに満足し、無防備に私に近づき、嘲笑して言う。
「それでは、ウェッテ先生、私と取引してくれますか？」

「もちろん、私は商人ですから。」

笑いが思わず口角に浮かぶ。だから私は、運命を信じず、神も信じない。

ヒナギクに囲まれたこの国は、王宮内でさえ、至るところ真っ白な花でいっぱいである。
だから、あの青色の影が私の眼前をちらっと過ぎて行った時、こんなにも目を引いたに違いない。

「ああっ、私を困らせないでください。いいですか、これは国王陛下が受け取った隣国からの贈り物ですからね、ぶつけて壊してはいけません！」
「オレは王女殿下にちょっと見てもらうだけで、すぐに持ってきて戻せるよ！安心してください！！！」

金髪の少年が召使いのように見える青年に追いかけられ、明るい笑い声が、先ほどの平穏な静けさを劈（つんざ）いた。

「またあのピザ（披萨）ですね、まあ、王兄（おうけい）がどう考えているのか分かりません。王宮内で一日中、食霊が悪事をして回っているのに放任ですよ」
「食霊ですって？」
「どうしました？ウェッテ先生？」
彼の顔に浮かんだあの無邪気な笑顔を見て、突然私は興味深いことを思い出した。
「なんと…彼だったのか…」

人間は裏切りが得意だ。
このようなことを、私はかつてあの人に何度も注意した。

「あなたが今ここにいる理由は何だと思っていますか？」
「このような生活は良くないですか？昔の私は勉強に没頭していました。きっと、できるだけ早く自分が独り立ちして政治の事務処理を行うことで初めて、一日も早く年老いた父王を助け、妹を保護することができると思っていました。」
「彼女は現在、あなたの代わりに王になりました。」
「うん、私は彼女に借りがあるのかもしれません。私のせいで、彼女は健康な体を持てなかったし、当然受けるべき愛情も得られなかった。」
「借りですって？あなたたちは明らかに一緒に生まれて、容貌までもがこのようにほぼ同じなのに、

いったいどうして彼女はあなたを恨むことがあるでしょうか？」
私は手にお椀を持ったまま、これで日に日にあの人の体を毒薬で蝕（むしば）みながら、笑いながら言った。
これは、私の御侍（おんじ）が私に渡したものであった。この薬は死に至らせるのには不十分だが、人を日に日に弱らせることができるのを、私は知っている。

「あなたはどう思う？今この国の人々は幸せに暮らしているでしょうか？」
すでに数えきれないほど何遍も読んだ物語の本をぱたんと閉じて、あの人は何のためらいもなく薬を受け取って飲み下した。しかし突然で訳が分からなかったが、私にこんな質問をしてきた。

「もし私がはいと言ったらどうします？」
「それなら私は信じます。」
「ふふ、あなたは本当はそう思っていないように聞こえますが？」
「私が答えを知っているはずがない、そうでしょう？だから私は、私の目の前に立っているあなたを信じることを選んだの。」
あの人は、ずっと空を眺めていた目をそのまま私に向けた。その目は、あの空の中にある日の光を映していて、ずっと暗闇の中にいる私にとっては、あまりにも目を奪わんばかりに眩しすぎた。

信じますか……私を……
それにしても実に面白い冗談ですね。

「このように、契約を切ったまま食霊を支配することはできますか？」
「もし私がはいと言ったらどうします？」
同じ言葉であるが、この時はもう既に、あの人がいる高い塔の小さな屋根裏ではなく、あのカール親王の邸宅であった。

「当然、試してみる価値があります。」
彼は私の手の中にある黒い短剣（＝匕首（ひしゅ））をすぐに受け取り、まっすぐな眼差し（まなざし）でそれを見つめ、目を逸らさなかった。
では、目の前の彼が信じているのは、果たして私だろうか、それともこの短剣だろうか？

実はこれはただの実験にすぎない。私でさえ、それが必ず実現できるかは保証できない。
しかし、真偽の見分けがつかない物事こそ、嘘になる価値がある。
興味深いことに、人間自身が望むことなら、たとえどんなに非現実的でも彼らは喜んで信じてしまう。

すぐに、あの人はカッサータ（卡萨塔）という名の食霊をまさに召喚し、そして計画通りに国王のそばに配置した。

（2020.06.28 作成）

——

威士忌　故事 II.　无神妄论

　人类是个格外有趣的东西。
　如果说飨灵的本身是梦想之力，那么人类便是纯粹的欲望集合体，纯粹到除了自己之外，都想要吞噬的存在。

　取得了他们的信任之后，那个之前虚伪的男人很快对我有了改观。
　在我提出准备时间后，善良的国王欣然答应了我的请求。
　同时那个男人也主动向国王请缨，负责在这段时间招待我。
　也是那时我知道了，他是国王的弟弟——卡尔亲王。

　「维特先生明明是商人，没想到还明白医理啊。」
　「略懂而已。」
　「是之前在哪里做过这样的工作吗？」
　「医学也好，炼金术也好，都是为了让自己有更多用来交易的筹码。」
　「交易？」
　「嗯，您忘了吗？我是个商人呐~那么，有什么是最值得和人拿来交易的东西呢？」

　我轻轻地用手指敲着头侧，想让他那腐朽的脑袋能有点思考的用处。

　「金钱？珍宝？还是权力？」
　「呵呵……是生命。没有人能躲过死亡，不是么？」
　我看着这个眼底流露着欲望的人类，微微地压低了我的声音。
　果然这样的话得到了他的重视，他的表情在一瞬间凝固了，而后我又漫不经心地转过了头。
　「不过，即使是这样，生命的价值也是因人而异的。」

　「那是自然，人本来就是有贵贱之分的，这就是为什么我会在这里的原因，也是我以后会成为王的证明。」
　「您说的没错，一切都是命运的安排……」

　显然他满意于我如他所愿的回答，毫无防备地走近我，讪笑道。

「那么，维特先生，你愿意和我做一笔交易吗？」

「当然，我是商人。」

笑意不自觉地浮上嘴角，所以，我不相信命运，也不相信神。

这个被雏菊环绕的国家，就连王宫内也到处都是纯白的花朵。
所以，那抹蓝色的影子从我眼前一闪而过的时候，才会如此显眼。

「哎哟，您别为难我了，这可是国王陛下收到的邻国赠礼，可不能碰坏了！」
「我就是给公主殿下看一下，一会儿就会拿回来的！放心吧！！！」

金发的少年被一个看似仆人的青年追逐着，爽朗的笑声划破了方才的祥和宁静。

「又是那个披萨，也不知道王兄怎么想的，放任一个飨灵成天在王宫里胡作非为。」
「飨灵吗？」
「怎么了，维特先生？」
看着他脸上那天真无邪的笑容，我突然想到了一些有趣的事情。
「原来…是他啊…」

人类善于背叛。
这样的事情我曾提醒过那个人很多次。

「你觉得为什么你如今会在这里呢？」
「这样的生活不好吗？以前的我忙于学习，想着一定要尽快让自己独立处理政事，才能早日帮助年老的父王，才能保护好妹妹。」
「她现在代替你成为了王。」
「嗯，也许是我亏欠了她，因为我，她没能拥有健康的身体，也没能得到应有的疼爱。」
「亏欠吗？你们明明是一起出生的，连容貌都是如此相似，她又怎么会恨你呢？」
我端着手里的这碗日渐侵蚀着那个人身体的毒药，笑着说道。
这是我的御侍交给我的，我知道这药不足以致死，却能让人日渐虚弱。

「你说，现在这个国家的人们是不是幸福地生活着呢？」

合上了早已看了无数遍的故事书，那个人没有任何犹豫地接过并喝下了药，却又突然莫名地问起了我这样的问题。

「如果我说是呢？」
「那我就相信。」
「呵呵，听上去你不是真的这么认为的吗？」
「我不可能知道答案，不是吗？所以我选择相信站在我眼前的你。」
那个人一直望着天空的眼睛继而转向了我，映着那空中的日光，对于一直在黑暗中的我而言有些过于刺眼夺目。

相信……我吗……
还真是个有趣的笑话呢。

「这样就可以在切断契约的同时控制飨灵吗？」
「如果我说是呢？」
同样的话语，但此时却已经不是那个人所在的小小的高塔阁楼，而是那位卡尔亲王的府邸。

「那自然值得一试。」
他很快接过了我手中的黑色匕首，眼神直直地看着它，不曾移开。
那么，眼前的他相信的究竟是我还是这把匕首呢？

其实这也不过只是一场实验罢了，连我也无法保证那一定会实现。
但无法辨别真假的事物才有成为谎言的价值。
有趣的是，只要是人类自身所希望的事情，无论多么不现实他们都愿意相信。

很快，那个人便召唤出了名为卡萨塔的飨灵，并按照计划安插到了国王身边。

本文引自 哔哩哔哩-食之契约 WIKI：http://wiki.bligame.com/szqy，文字内容遵守【署名-非商业性使用-相同方式共享 3.0 (CC BY-NC-SA 3.0)】协议
转载请保留原文链接：https://wiki.biligame.com/szqy/%E5%A8%81%E5%A3%AB%E5%BF%8C